

思 い 出 の 記 ^(※1)中第 23 回卒 氏 家 義 之 ^(※2)

当時（大正 8 年）の学制は現在の六三三制と違って六五三制であったから、小学校から中学校にはいる為には入学試験があった。中学校は相馬郡に 3 校しかなかったから当然競争率は 3 倍近くもあり、試験科目は音楽、体操を除いた全科目で、国語、数学はもちろん作文、習字まで行われた。試験は 3 日間もあり前日の成績が悪いと受験者氏名を抹消され次の日以降受験することができなくなるので大変であった。入学定員は 3 クラスで 150 人であったが、発表を見たら合格者は 135 人になっていた。これは原級留置（つまり落第）が 15 人もいたからである。学校の成績の評価は 90 点以上が一等、80 点以上が二等、五等は 50 点以上、六等が 49 点以下となっていて、学年末に 1 科目でも六等があるか、または全体の平均が五等以下であると落第となるので、上位の成績でも 1 科目で落第する可能性があった。そのうえ転入や転出もあったから、115 名の卒業生のうち一緒に入学した仲間は 6、7 割位ではなかったかと記憶して居る。

入学して 2 ヶ月、6 月からは夏の制服である。詰襟のカラーが頤にさわるのを気にしながら、白線 1 本をつけた帽子をかぶり新しいカバンを担いで登校した。すると生徒控室の入口の 4 枚の硝子戸の中央の 2 枚を人が一人通れる位空けてあり、中に 5 年生の髭面がズラリと並んでいた。恐る恐るそこを通ると、途端に両側からヨイショヨイショと押され、やっと通り抜けた時は、新しい制服はヨレヨレ、身体は汗でグッシヨリになっていたのである。

先生方には大体ニックネームがついていた。新任式の際学校長の紹介があり次いで新任の先生の挨拶がある。それが終る頃には後列の方で仮のニックネームが私語かれ、いつとはなしに定着して行った。チムニー、軟化液、海月、ぬらり、河豚、キンチロ、チャップリン、カーペンター、オメガ、樽、らっきょ、山猫、馬、桜餅、ターザン、ピン、老骨等々それぞれ先生方の風貌の一端がうかがえて妙であった。

中学 3 年の 2 学期の期末試験の時である。歴史の試験が始まって間もなく、突然寄宿舎の一室から火事になった。もちろん試験は中止、なまけ者の連中は 2 学期の成績発表が延びたのでのんびりとよい正月を迎えることができた。3 学期になって近所に下宿している I という上級生を訪ねたら一しめぐらいの西洋紙があった。見ると書きかけの答案を集めたものである。私の答案はなかったが、これには驚かされた。

火事の最中、大野 ^(※3) 先生が一人で大型オルガンを運び出したが、跡片付けのときまた運ぼうとしたら持てなかったことや、寄宿舎の友人の室から本や夜具等を運び出すうちに煙に巻かれ、やっとはい出したことが思い出される。

中学 4 年 2 学期の始業式が終って帰宅した時である。グラグラッと来た。関東大震災である。その時の号外が 2、3 残っているので取り出して見た。『東京日日新聞』の号外は、安政以来の大地震、震幅は 4 寸（12cm）、震源は伊豆の海底とあり、『いばらぎ』の号外によると、鎌倉、横須賀方面は海嘯のため一件の人家も見えない、浅草十二階（日本で初めてエレベーターをつけた）、国技館は倒れ、東京、千葉方面の電信の望みなし、東京市内は戒厳令を布き出入一切禁ぜられている、と書かれている。当時原町市に無線塔が建設され、関東大震災の様子がアメリカに伝えられ救援が早くできたのである。

今は故人であるが長尾春道 ^(※4) 君という友人がいた。無線に興味を持ち、簡単な電信機を作り二人で通信し合ったりしていたが、原町の電波は波長が長すぎて受信することができなかった。その後NHKが芝浦で試

験放送を始めたとき、相馬市内で最初にスピーカーを鳴らしたのは私の作ったラジオで、市内の多勢の人が見（？）に来られたものである。この受信機一式は今でもそっくり保存されている。

大正 13 年春修学旅行があり、コースは日光および関西方面であった。初日は岩沼で乗り換え日光に行き、東照宮その他を見学、日光町に泊った。夕食後散歩に出かけた。外人客がいるので会話をしてみようというのである。ところがこの頃の我々の英語は、家も馬も蛇管も皆ホースといった具合であるから大変である。それでも日本語の片言まじりで笑い話になったようである。夜の散歩から帰って来た者の話によると神橋を渡って来たというのである。あの橋は奉幣使だけが渡御する橋で、一般は通行禁止のはず。橋の両袂には人の背丈程の柵がありこれを越して渡るのは大変なことであったと思う。しかし次の朝の話によると、昨夜第二陣の数名も渡って来たということであった。

次の日上野に出た。バラックの駅を出ると一望焼野原である。震災の火の恐ろしさをまざまざと感じた。万世橋まで歩き、(当時は環状線がなかった)それから東京駅に出た。東海道は夜行、朝 4 時すぎ大津に着いた。駅を出ると駅前通りに一軒だけ電灯をあかあかとつけて土産屋が店を開いていた。これ幸いと一同ドツと店に入り絵葉書等を買った。それから近江大津の方に向ったが、その後から先程の土産物屋の親父さんが大声で追いかけて来た。話によると金を払わぬものがいたとかいうことで、一同所持品等を調べたが犯人はついに判らなかつたようである。

京都は観光バス等が無かつたから見学地は歩くか電車に乗るかしなければならなかつた。電車通りで先生が手を挙げると電車は止まり、一般客を次の電車に移して団体用に切替えて目的地へ運んでくれた。とても親切で便利で面白く感じたことである。

奈良見学のときのことである。奈良の大仏を拝観し裏手から正倉院に立寄ったときである、突然衛士が来て生徒数名と先生を連れ去ってしまった。何でも土堀に足をかけて中を覗いたとか、壁に落書をしたとかいうことであつたが、無事放免されて旅が続けられた。というわけで引卒された高野^(※5)、斎藤^(※6)、荒^(※7)の各先生方には計画、交渉、ガイドから後始末まで大変な御苦勞をおかけしたことと思っている。

昭和 15 年 4 月の事であるが、私は群馬県から現在の福島高校に転任して来た。校舎を案内されてびっくりした。玄関を始め、教室の配置、廊下の板の張り方から凸凹まで、相馬中学とまったく同じなのである。間違つて母校へ来たような感じがした。これは相馬と福島にいっしょに中学が建設されたためである。昔は福島を第三中学校、相馬を第四中学校と呼んだ。とにかく校内の案内がよく判り大変便利をしたことであつた。今は両校舎とも鉄筋に改まりなくなつてしまった。

さて母校も齢 80 歳、まことにおめでたく、かつて校庭に聳えたポプラの大樹のように、今後ますます発展してよい後輩が送り出されるよう祈念して思い出の記といたしたい。(52.9.10)

(※1)「相中相高八十年」1978(昭和53)年5月7日発行、「思い出の記」より。

(※2)大正14(1925)年卒、中村出身。

(※3)大野慶三郎。相中教諭：英語/柔道 明治45(1912)年～昭和2(1927)年。

(※4)大正14(1925)年卒、飯豊出身。

(※5)高野藤三。相中第1回、明治36(1903)年卒、中村出身。相中&相高教諭：英語/漢文 明治39(1906)年～昭和26(1951)年。

(※6)斎藤丈夫。相中教諭 大正9(1920)年～昭和14(1939)年。又は斎藤久基。教諭：図画 大正2(1913)～大正13(1924)年。

(※7)荒 七三郎。相中教諭 大正11(1922)年～昭和5(1930)。

(転記&※脚注 村山)